

終章

第1節 本研究の意義と限界

第1項 フィールドワークを振り返って

対象者の日常生活に近づき彼らが歩んできた人生に関する語りに耳を傾けたが、みえてきたのは、本論を貫く課題としての日本の村落社会における生者と死者との関係性の有様、そしてその背景にある諸要因である。本研究を出発させた死者との濃厚かつ直接的なつながり、本論で言う死者との『擬人化した情緒関係』が確認された他、一定の距離を置きながらも死者との何らかの関わりをもつ対象者の姿が浮き彫りになった。これらは日本人のコスモロジーの一角であり、日本文化の僅かな一部である。

しかし、対象地域に今日も息づいている生者と死者とのつながりは、現代社会の中の居場所を次第に失い、やがて姿を消しかねない。本研究では、敢えて大正生まれ世代に着目したが、同じ地域に住む若い世代に焦点を当てたならば、おそらく異なる結果が得られただろう。したがって、現代社会に合わなくなりつつある死生観の一部を書き留めてまとめたこと自体が、本研究の意義を示している。

すでに触れているように、本研究には限界性が生じている。その限界性は特定の地域のみをフィールドとしたことに起因している。とくに、地域性が死者と生者とのつながりをどこまで規定しているのか、データの一般化がどこまで可能であるのかは、課題といえる。また、インタビュー調査の男女割合をみると、女性が男性より多く、分析の材料となった口述には女性の声が優位である。よって、フィールドで浮き彫りになったつながりが女性たちの生き方と考え方を大いに反映しているといったバイアスがかかっているかもしれない。さらに、本研究では、地域のモデルを用いて、漁村から山村まで、そして地域に位置する施設までと広い意味での地域社会を扱っているが、とりわけ死生観や他界観について漁村と農村と山村の間にはかなりの相違が生じる可能性はある。しかし、対象者の人数、またはデータの制限があり村落社会内の違いや共通点に関する分析および考察は不可能である。これらを今後の課題にしたいと考えている。

第2章2節で抽出した各パターンと各要因が不変的かつ固定的なものではなく、枠組を規定するものだけのものであると既に述べている。というのは、対象地域にしか観察できない中身ではなく、その輪郭を規定するもの、そのエッセンスを手にしようとした。そこからある程度普遍的なものを見出すことができたといえる。したがって、確かに極めて限定した対象に関する研究ではあるが、対象現象の様々な現れをパターン化したことによって、本研究の対象以外の地域や文化すなわち異なる標本にも適用できると考えられる。しかし、これらを確立させるために、比較研究などを行い検証する必要がある、新たな課題として今後の研究活動へと持ち越されることになる。

第2項 異界とのネットワーク

対象地域において、死者のすむ異界は仏壇や墓などを媒体装置として至るところに存在しており、リアリティを保ち続けているといえる。近年、河童や狸のような異界の住民たちがリアリティを失っている中、死者は、今もなお、生者と二者関係を持ち得る。さらに、生者に対して語りかけたり、生者を左右したり、生活空間の向こう側に常に息づいている存在であるといえる。その背景には、生者に決してその秘密を明かさないうちの死そのものがある。死んでみないと、死後の世界が存在するかどうかは誰にもわからない。つまり、生前体験できないものであるがゆえに、死、そして死者もまた秘密を帯びており、異界の有力な住民であるといえる。

本論では、ネットワーク論を用い、死者もネットワーク・メンバーになり得ると仮定し、死者との関係性をめぐる再考および再構築の必要性を訴えた。そして、本研究を通して、死者を含むネットワークが類型され確認された。このようにして、日本人の高齢者に適した新たなネットワーク・モデルが浮き彫りになったことの意義は大きいといえる。

しかし、死者との関係性、ひいては異界とのネットワークが現代社会を左右する傾向とトレンドに果たして合っているかどうかは課題である。「人間は生活的現実とは異なる想像上の次元の世界の実在性について何らかの確信を抱くことを必要としている。世界の諸文化がいずれもそうした超越的世界についてそれぞれ固有の観念を用意している事実は、証左である」と百川(2007)が指摘しているように、異界は諸文化において求められており、各国各文化に通ずる概念である。だが、科学文明社会では人間世界の彼方にあるもう一つの別の世界、すなわち異界を拒否しており、現世中心主義や人間中心主義の傾向が強いため、死者の世界や目に見えない現象を語るのは難題である。第1章第3節で紹介した佐藤弘夫の研究(42頁を参照)においても、近現代に入ってから、膨らんでいく現世とは対照的で、他界が次第に縮小してきたことが示唆された。ましてや、異界や死者、神の領域まで否定してきた現代チェコ社会ともなると(次節を参照)、異界とのネットワークは不要のものになる。

死者と生者を結ぶ異界とネットワークの類型化が本研究の目的でもあったが、今後、その適応性と有効性について検証する必要がある。日本の村落社会が提供したモデルを適用し、患者や施設利用者、または悲嘆ケアを要する遺族などを対象とした実践的かつ実証的研究を実施しない限り、本研究で得られた異界とのネットワークは一仮説に過ぎないということになる。

第3項 死者とのつながりと生き方

生者を支える死者、さらに「死者のおかげで」と表現された生者による感謝の対象となる死者は、当然ながらこの生者たちの生き方にも影響を与えている。ましてや、人間の世界を超えた存在として、なおさらそうである。換言すると、個人的レベルにおいて、亡くした親しい人とのつながりを持ち続けることによって、自分のアイデンティティも維持で

き、死者を人生の支えとなる存在として位置付けることが可能なことは、フィールドで確認済みある。翻って、個人的レベルでは、死者を支えやアイデンティティを維持する要因として意図的に設定することもある。これを可能にする装置とは、記憶である。いわゆる“いい記憶”、極端に述べると、生者にとって都合のいい記憶を意図的に作るということである。これは「いい思い出しか残っていない」という対象者の言い分に代表されるのではないかと考えられる。死者と対話しながらも、死者の発言を検閲しているかのようなのである。死者に口ありと言いながらも、実は死者の口を閉ざすのである。高齢期の場合、個々人を支える人的資源が減少している中で、対話の相手であり、支えであるという死者を生み出すのは、まさに生き方であり、生きる戦略である。

しかし、この次元を超え、死者は同時に、超個人的レベルにおいて決して扱いやすい他者ではない。その証左となるのは、『守護』すなわち生者を守る死者、または『感謝』の気持ちの対象となる死者である。「死者（先祖）のおかげで生かされている」と表現されているように、生者の世界を超えている存在としての性質をもってあらわれたりするるのである。むしろ、これらは、ポジティブな意味のみをもつというわけではない。生者の世界を超越している存在であるがゆえに、時には崇る死者として、恐ろしい死者としてあらわれてくる。生者から死者へのプロセスを遂げ、異界の領域に入ったことにより、死者は、生者の世界を超えた立場から、境界を通して生者に影響を及ぼし生者を左右しているといえる。

死者は生者に一種の眼差しを提供しており、現実世界とは異なる次元や奥行きをもたらしているといえる。いうまでもなく、生き方との関連が強く、超個人的レベルにおける死者との関係が失われれば、上記の眼差しといった倫理的装置もそのまま消えゆくであろう。しかし、異界を否定したことによって、「皮肉なことに、現代人は、自分たちの社会を見つめ直すための『思考方法』としての『異界』、(中略)の重要性に気づいたのであろう」(小松, 2003: 187 頁)。同様に、科学万能の現代社会では、死にまつわる事柄や死者を日常から追放したが、それがやがてスピリチュアルブームとして、霊魂話や妖怪話のブームとして、もしくは「死のポルノグラフィー」¹といった現象として現れてくる。このように死や死者と離され、死のリアリティを失った社会の中では、「霊魂のマグマだけはいろいろなところに出てきてしまっている。(中略)それがさらに商品化されていく」と新谷(2009: 145 頁)は解釈している。したがって、日常から追い出され、抑圧されてきた生者と死者を結ぶネットワークの構造とそのような関係の必要性に関する再考を行ってきたことは、拙論における有意義な課題である。

本研究では、終始専ら死者に注視しているが、死者との関係がすべてではない。生き方に関しても同じである。死者との関係を自己の支えとして認識している人もいれば、死者にほとんど関心を払わない対象者もいる。戦場から故郷へ帰還し、農業の傍ら都市部で出

¹ ゴーラー (Gorer, 1955) が初めて用いた語である。身近な死が日常生活から排除され、タブー視された結果、同じくタブー視されてきた性的行為を扱うポルノグラフィーと同様の社会現象が生じることを意味している。つまり、自分の死あるいは家族や親しい人の死をタブーとしている現代社会では、反対に、戦争・交通事故・パソコンゲームなどにおける死を露出する傾向が強いということである。

稼ぎをしてきた男性の対象者たちは、その具体例である。死者を尊敬し、先祖に感謝し敬っても、死者を自分の支えとして認識していないケースもあった。死者どころか、生者とのつながりについても同様である。人生の危機が訪れたときの支えを、自分自身の身体、自分の力に求めたりしているからである。これは、大正生まれ世代だけの話ではない。アンケート調査でも人生の支えについて設問したが、インタビュー調査と同様に家族を支えとする回答が最も多く、その他友人や周囲の人々など人間関係に回答が集中した。しかし、少数ではあるが、神仏、学校、仕事、自分自身、趣味やペットなどを支えとするといった回答もみられた。

したがって、人と人とのつながり（そして死者とのつながりも同様であるが）は、確かに重要な要素として生き方に影響を与えているが、唯一の支えではないことを忘れてはならない。前章で構造化した異界とのネットワークもこの証左となる。死者を中心とするネットワークもあれば、生者の世界だけで完結されるネットワークもある。

第2節 東と西の間をまたいで ～東西の相違点および共通点に関する一考察～

第1項 死者に口なし

筆者は常に日本人と接している中で、意識的あるいは無意識的に、西洋の文化的コンテキストで育った眼で日本をみている。仏壇や死者に向かって話しかけている高齢者の姿を、日本にきて生まれて初めて目にしたことは、本研究の方向性を示したものである。まさに出発点となったといえる。なぜなら、西洋文化・欧州の現代社会を背負っている筆者にとって、それは驚きの場面でもあり、好奇心を強く刺激された出来事であったのだから。

今日のヨーロッパでは、故人の媒体である遺影に話しかけたり、日常の出来事を報告したりすると、一種の精神病だと言われかねない。欧米では、死者とのコミュニケーションを取り続けることが不可能であることについて、親を亡くした子どものケアをする世界的に有名なダギーセンターの所長を務めているシュールマン氏が、下記のように述べている (Schuurman, 2009)。「写真に話しかけたり、亡くなった人をみたと信じたりすれば、変だと思われるからでしょう。けれども、それは子どもには大事な経験なのです。そのため色々な意味で、この分野において日本の文化はアメリカより深いように思います」(55頁)。シュールマンは悲嘆のケアでの経験を踏まえながら記述しているが、死者との直接的なつながりを持ち得ない欧米社会の現状をはっきりとさせている。この現象の背景には、合理主義や現世主義の原理を取り入れた特に米国と西欧社会の有様が少なからずあると考えられる。そして、もう一つの要因として考えられるのは、死のタブー視である。つまり死、特に身近な人の死を語れない社会といった現象である。

一方、近代社会のこのいわゆる典型的な姿は、最も強力な要因ではない。死者の口を封じたのは、世界宗教であるキリスト教である、と池上(2002)は解釈している。つまり、「一般に世界宗教と呼ばれるような大宗教は、それまでの社会にあった死者との直接交流、直接対話を、何らかのかたちで抑えようとしてきました」という主張である(129頁)。死後の世界のように、人間の死や死者との関係、すべてを絶対的な存在である神の下でまとめ完結しようとしているキリスト教は、死者との個別のかつ情緒的な直接のつながりを自分の領域にしたということである。さらに、波平(1990)は、「日本人において生き残った者が、死者との断絶を拒否するどころか、絶えず、自分の思いを死者の言葉で代弁するというやり方を採用している」のに対し、「キリスト教文化が、生者は死者たちとのはげしい断絶への意向を持っている」と分析している(33頁)。この相違点には、スミス(Smith, 1983)も気づいており、異論がないであろう。

第2項 深層に潜んでいる死者との関係性

しかし、池上(2002)も指摘しているように、キリスト教以前には死者との直接交流や対話があったという点もある。エリヤード(Eliade, 1964)は、数多くの祭祀や民俗を紹介しながら、死者と生者との交流について論じている。西洋文化の大黒柱であり、何世紀

にもわたってヨーロッパの文化に影響を与え続けている古代ギリシアでは、祖先崇拜に類似したものや、死者との直接交流がみられる。基層文化に関する筆者の考えが正しいとすれば、キリスト教の影響を受けつつも、一つの原点として死者と生者とのつながりは形式を変えながらもどこかに潜んでいるはずである。

その証左となるのは、キリスト教が広まった後の時代の民俗である。エリヤードやマーハル (Eliade, 1964; Machal, 1995) などが紹介しているように、キリスト教が伝来されて唯一の宗教としての定着を遂げた後も、死者との直接交流を土台にした行事は行われていた。さらに、少なくとも中世までのヨーロッパでは、「死者は生者をつかんでいる」¹という言葉があるように、死者は生者に対してかなりの影響力をもっており、生者の日常を直接に左右する力を有していたということである、と、シュミット (Schmitt, 1994) は述べている。その背景には、ゲルマン、スラブやケルト民族のキリスト教以前の宗教の影響があり、死者ないしは死霊を対象とした信仰が強い影響を及ぼし続けたと推測できる。生者による想像や夢を通して、あるいは生者の内なる世界に死者が生かされ、そういった死者を含む異界は、中世の人々の世界観の構成的部分であった。ただし、一神教であるキリスト教が主な宗教となった文化圏では、そういった直接の関係性が次第に失われ、究極的な存在である神にすべては集中してしまうということになる。要するに、死者とのつながりや死者そのものは、神の領域の中に吸い込まれ、完結されることになる。他者という領域、つまり人間が関係性を持ち得る領域から死者は消失され、本研究で解明を試みている死者との直接のつながり、とりわけ個々人のネットワークに位置される死者とのつながりは、成立しない環境となったのである。つまり、「従来のヨーロッパ由来の見方をものすごく単純化して、図式化していってしまうと、人の領域とこの無限大の極限²だけがクローズアップされて、中間の他者の領域が消えてしまうのだ。たとえば、宗教とは絶対者、あるいは究極的存在との関わりであるというような言い方がしばしばされるが、そうすると両者の中間がなくなって、一気に極端に飛んでしまう。しかし、たとえば神社に初詣に行く時、別にその神様を究極的な存在だなんて思っているわけではない。このように、普通の人間同士の相互了解関係でもなく、かといって一気に絶対者にいってしまうのでもないような、そういう中間的な他者を考えてみたらどうだろうか。そして、死者というのは、いわばその他者の1つの代表として考えられるのではないか」と末木 (2009: 28 頁) は日本宗教史の視点から死者の位置付けについて考察している。

しかし、ヨーロッパにおいては、上記の中間をなくし絶対的な存在をもたらしたのは、キリスト教であろう。キリスト教伝来以前のスラブ系民族は、様々な祭祀を通じて死者との直接交流を行い、林や森との境で死者をからかうような形で呼び出し、対話を試みようとした事例が報告されている (Machal, 1995)。それに対してキリスト教では、いわゆる「異教」の影響を抑えるために、10 世紀のフランスで「死者の日」という祭祀を設立させた。

1 筆者による訳。原文は「The dead grasp the living」となっている (Schmitt, 1994: 221 頁)

2 つまり、神の領域である。(筆者の補足)

そこから欧州全域にわたって定着したこの祭祀は、死者との直接的な交流に代って煉獄という概念を導入する。当時、現世で罪を犯した死者たちの魂は天国へ行けず、煉獄に留まっていると説かれ、「死者の日」の祭祀を通して、煉獄に留まる期間を短縮できると信じられていた。このようにして死者は神の領域に入り、死者との直接交流が失われることになる。その代わりに、煉獄と天国の概念をもとにした追善供養のような、死魂の清めを祈る形となった。宗教家が媒体となり、もはや「交流」という形態ではなく、すべて超越的存在であり絶対的存在である神の領域になったわけである。

一方、周知のようにメキシコでは、何千年も前から続く遺骨を飾って拝む伝統的信仰がキリスト教の儀式と融合し、子孫のもとへ戻った死者の魂との交流が今もなおなされている。墓の派手な飾りはあまりにも有名であるが、死者について語り合う、酒を飲み、食事をしながら死者と語り合う民俗もあり、死者との直接のつながりを今日に至っても色濃く残しているといえる (Salvador, 2003)。これらは、基層文化が現代人の暮らしに及ぼす影響の一つであると考えられる。

さらに、メキシコ独特の行事のみならずヨーロッパでも、時代によって死者との直接交流を求める傾向が現れてくる。死者や死霊をある意味でロマンチックに捉え、場合によってはオカルトの影を見せる動きもあるが、休日に家族を墓地へ連れて行き、故人と共に沈思することが流行していた時代もあった (Aries, 1977)。とりわけ 19 世紀のイギリスでは、特に墓地を媒体とし、死者と対話したり死者に対する感情を表すことが社会的にも認められており、当時の記録や墓石に刻まれた文章が物語っている一般的な現象であった。しかし、キリスト教の立場としては、このアリエスのいう「擬人化した終末論」 (Aries, 1977: 336 頁) を批判し、否定することになった。19 世紀 70 年代頃までは、感情表現として認めようとする声もあったものの、その後、教団の代表者は死者との直接のつながりを強く否定し、早くも自分の領域、神の領域に取り戻そうとした。その結果、近代に入って死者との直接のつながりは再び否定されることとなった。

一方、20 世紀後半に入っても、死者との交流が社会的に認められなくとも、深層に根強く残っている証拠をみいだすことができる。ゴラー (Gorer, 1965) が 60 年代に実施した調査では、高齢者のみが死者との交流を行い、死者と対話する姿が浮き彫りになった。しかし、主な傾向としては、葬儀または墓地の意義が次第に弱まり、死者だけでなく死そのものを生活空間から追い払おうとする社会となった。ゴラー (Gorer, 1955, 1965) が主張しているように、死を語れない社会となり、悲嘆や死別による悲しみをみせない社会となった。そして、19 世紀後半から 20 世紀にかけて土葬に代って火葬がますます多くなり³、墓という死者との接点を意図的に持たない人が今も増えていると報告されている (Aries,

³ 遺体を単なる抜け殻として考える死生観がこうした変化の背景にあるとしばしば指摘されているが、ユダヤ教、そして旧約聖書とともにその伝統の一部を受け継いだキリスト教の中では、最後の審判の際に甦るために魂も身体も必要であり、19 世紀までは土葬が主流であった。遺体を大切にすることは今日のユダヤ教にもみられ、墓地を頑固に守ろうとするユダヤ教徒の姿に投影されている。魂と身体を分けて考える、すなわち心身二元論はプラトン哲学とともに誕生し、間違いなく、西洋の思想に大きな影響を与えてきたが、日本と西洋の文化を比較しているリーマンも指摘しているように、遺体を丁寧に葬って最後の審判までのこすとは、西洋人の考え方もあり、柳田の注目した日本独特の霊魂

1977; Tyden, 2009)。

第3項 チェコからの一報告

さて、これまで述べてきた事柄について、筆者の母国チェコという具体例を用いてもう一度考えておこう。欧州の中央に位置するチェコでは、技術と科学の発展もさることながら、40年にわたる共産主義政権下で伝統・信仰・宗教が弾圧を受けた。それを背景に、無神論者すなわち宗教をもたない人が総人口の6割ほどを占め、高い割合をみせている(CSU, 2001)。その結果、死後の世界を軽視し、死者との関係性を求めず、葬送儀礼という意味での葬儀を行わない人が増えつつある(Haskovcova, 2000; Cesta domu, 2004)。その一方で、死に対処できる装置を失い、医療現場のみならず社会全体に死にまつわる諸現象に対する戸惑いやタブーが生じた。死者や死を語れない、ある意味で代表的な西洋の現代社会といえる(Cesta domu, 2004)。死者との直接的なつながりを否定し死者の口を閉ざした社会は、ここにもあるといえる。さらに、日本と同様に約8割のチェコ人は自宅で最期を迎えることを希望しているのに対し、実際は8割のチェコ人が病院や福祉施設で亡くなる。

筆者は、チェコで行った調査を既報にまとめているが(郷堀, 2010)、ここでは、現代チェコにおける生者と死者との関係性をめぐって考察を行うことにする。無宗教の社会ともいわれながら、11月上旬の「死者の日」という行事は、依然として執り行われている。

本論の核心を成す日本での調査を意識しつつ、筆者は、2009年秋にこの祭祀の参詣者を対象に、フィールドワークを実施した。むろん、墓をもたない人口が増えている中、いわゆる墓参りを行うサンプルは、適切な標本とはいえないが、「一年に一度くらい故人のことを思う」「故人のためにお墓をきれいにしなくては」という口述がみられ、死者を意識し、または墓を死者との何らかの接点として考える傾向がある、と推測できる。ただし、日本の寺参りに相当するミサへの参加は極めて少ない状況である(CBK, 1999; 2004; 2009)。

さらに、上述したフィールドワークの一環として行ったインタビュー調査に応えたチェコの高齢者の大半は、他界や死者とのつながりをほとんど意識しておらず、現実の世界に価値を置きながら、この世から去ったものとのコミュニケーション、ましてや支えのような働きをまったく期待していないというのが最も多いパターンであった。



図32 死者の日はロウソクと花を墓に飾る。

観、梅原のいう基層文化からみた日本的死生観とは対象的である、と主張している(Liman, 2001)ヨーロッパにおける火葬の急増は、科学と技術の発展に伴った宗教役割の衰退、無宗教社会といった現象とともに誕生したといえる(Cesta domu, 2004)

だが、亡くした夫の写真を飾り⁴、ほぼ毎日亡き夫に話しかけているという対象者が一人いた⁵。「ここにはいないけど、ずっと一緒にいる。」と彼女は語っており、亡き夫を自分の支えとして位置づけている。これは、筆者が取り組んでいる調査で明らかにしようとしている日本の高齢者の多くがもつ感覚に近いものである。この対象者は、「主人⁶、天国からみてくれているよ」と話しており、墓の他に、夢や思い出を死者との接点として意識している。しかし、彼女はさらに、「こんなことを友だちに言ったら、笑われてしまうの。死んだ人に話しかけてどうするのって言われる」と話し、亡き夫とのつながりについて他人に話せない、この心情を他人と共有できない悩みを表に出している。つまり、この対象者のもつ死者とのつながりが社会的に認められていないというのが実態である。



図33 亡き夫と一緒に写っている写真を本棚の上に飾る

第4項 悲嘆ケアにおける死者とのつながりの再発見

ゴラー (Gorer, 1965) が 60 年代代に行った調査と同様に、無宗教の社会とも言われる現代チェコでさえ、死者との直接関係性は、潜在的意識として息をひそめているといえる。死者との直接関係を禁ずる宗教、宗教そのものを否定する共産主義、それに個人主義や合理主義といった影響を受け、科学と技術を重視しながら現世中心主義の路線を走ってきた西洋文明は、一種の限界にたどり着いたといえる。アティグ (Attig, 1998) は、死を否定し死者との関係を断絶した欧米社会における悲嘆を、多くの社会病理を引き起こす原因として考え、親しい人や身近な人との関係性を維持する必要性を、健全な生き方として訴えている。死を超えたつながりを最初に提唱したのは、クラスである (Klass, 1996)。クラスが「続きゆくつながり」⁷の理論を展開する際に何を引用し、何を土台にしたのかというと、それは日本における死者の供養である。日本における盆行事や仏壇の役割に関する諸研究を西洋の聴衆・読者に紹介しながら、死で別れた後も続くつながりの必要性を訴え、独自の悲嘆ケアを展開している (Klass, 1999)。

他にも、ベッカー (2008) は、スタンフォード大学のトランスパーソナル心理学研究所で実施されているサイコマンティウム、すなわち故人との内心対話療法といった取り組みを紹介しており、日本文化の中で生まれた死者との交流には類似した効果がある、と述べている。日本国内でも、大下 (2005) や谷山 (2008) などが提唱するスピリチュアルケア

⁴ チェコには、仏壇や神棚に相当するものはないため、自らオイルランプと花を置いている。

⁵ 属性：性別：女性；年齢：85歳；居住形態：一人暮らし（農村）

⁶ 実際は、亡き夫の名前を使っている。

⁷ Continuing Bonds

には、死者との交流や死者とのつながりも含まれており、医療やカウンセリングの分野では、近年、注目されている要素である。

超高齢社会となった今日の日本では、介護やターミナル医療をはじめ多くの領域において死者や死そのものに対する意識、考え方、生き方の再考および再構築を迫られている。医療現場の抱えている死や死者にまつわる諸問題はすでに事例報告などで明らかになっており、死と死者をどう扱うのが今後の課題である。さらに、これまで述べてきたように、死をタブー視して死者とのつながりを軽視してきた西洋文化でさえ、死者との関係性に関する再考・再構築を試みているところである。しかし、本論でもっとも示したかったことは、日本文化や日本人の自然な感覚には死者とのつながりや死者との交流が含まれているということである。支えである親しい存在と恐ろしい存在という両側面をもつ死者とはいえ、この死者を異界という生活空間の一部の中に位置付けながら、死者に対して振る舞ったりして死者との関係性を持ち得るツールが、日本文化には備わっており今もなお有効な概念である。もし現代日本人にも死者とのつながりが必要であるとするならば、それを「続きゆくつながり」、すなわち「continuing bonds」という逆輸入した概念としてではなく、日本人のルーツとして、日本の基層文化の一部として認識した上で、この時代に合わせて再構築すべきであろう。

第3節 おわりに

本論をまとめている平成22年の夏ごろ、大勢の100歳以上の高齢者の所在が不明になっていたことが発覚した。中には、家族にも、地域住民にも、行政にも気づかれないまま、すでに死亡している者もいた。マスコミを騒がせたこの出来事は若干特殊なケースだが、近年、単独世帯が増加していることを背景に、一人暮らしの高齢者たちが疎外感を抱きながら死にゆく、いわゆる孤独死は確かに増えている¹。その延長線上には、特に都会では遺骨を引き取らない遺族の増加や、本来、家族と友人たちが立ちあうべく葬儀を行わず、たとえば、東京都内で執り行われる葬儀の3割を占めていると推測される直葬という事象が急増中²であるという事実がある。その他にも、自殺、孤立、高齢者や児童が犠牲となった残酷な虐待など、枚挙に暇がないほど、日本の現代社会は人間関係に起因する多くの問題を患っている。

人間関係の希薄化、家族や地域社会の崩壊が取り挙げられ、NHKスペシャルのタイトルにもなった『無縁社会』³もまた、この現象の呼び名となりつつある。「縁」とは、仏教における縁、つまり広義として、結果を生み出す原因という概念はさておき、巡り合わせ、または、物事とのつながりや肉親などのつながりと一般的にされている。中村(1994)がまとめているように、「一切の事物は、相互に限定し合う無限の相関関係をなして成立している」というものである。だが、このような縁をもたない、または、もち得ない現代人が増えているということなのである。

しかし、本当にそうなのであろうか。平成22年の暑いお盆の時期に田宮氏を訪れたときの言葉が思い浮かぶ。日本的死生観を土台とした看護や終末期医療として「ビハーラ」の構想⁴を提唱した田宮氏に、家族のいない患者のために建てられたお墓をみせていただいた。墓石に刻まれた、親鸞聖人の教義を約やかに説いた金子大栄の『縁』という字をみた筆者は、無縁仏の話をはじめたが、田宮氏から「無縁というのは、この世にいる人たちが勝手に決めることだ。実は、みんな、縁をもってこの世に生まれ、また縁をもったままこの世を去っていくだろう」と指摘された。本論も、この『無縁社会』の実態を分析した上で、その実態を嘆くようなものではない。今日の社会で忘れられつつある一種の縁、具体的にいうと、生者と死者とのつながりについて考察してきたつもりである。

しかし「近代以降は、神や死者の棲む世界はさらに縮小し限定された。もはや大半の人々は、日常生活において超越者との関わりを意識することはない。無神論を公然と標榜する人々が珍しくなくなり、他界は墓場や怪異スポットといったこの世のごく限定された場所

¹ 「孤独死」に関しては明確な定義がないため、警察統計上では「変死」に分類しており、統計数字は存在しないが、清水ら(2002)の研究、横浜市の実態調査(2010)や岐阜県県政政策研究会の報告書(2010)などに代表される日本各地からこの実態が報告されている。

² NHKnews watch シリーズ“無縁社会ニッポン④”「直葬」2010年1月10日放送 (取材: 仙台局 山口満)

³ NHKスペシャル『無縁社会』2010年1月31日放送

⁴ 田宮仁(2007)『「ビハーラ」の提唱と展開』淑徳大学総合福祉学部研究叢書25』学文社

や、暗闇の片隅に押し込められてしまうのである」(佐藤, 2007 : 218)。死者のいる世界を軽視し異界を無視する強い傾向があるなら、異界とのネットワーク自体が成り立たなくなる。本研究の核心を成した死者との目に見えないつながりも、現代人には通じない概念になってしまう。社会から隔離され疎外された孤独な生活を送っている人々が、死者との関係性も失ってしまい、人間界のネットワークも異界とのネットワークも空になる。完全な無縁社会となってしまう。

だからこそ、日本の村落社会に培われてきた生者と死者とのつながりは、再考すべく現代社会へと還元させるべきである。さらに、日本から発信すべきである。終末期医療のみならず、西洋国々で暮らす人々の教育や生き方に対しても大いに提言できると西洋人の一人である筆者は確信している。このような死者との関係性の有様について示唆を与えてくれた対象地域の方々に感謝をしつつ、本論の筆を置きたい。

引用文献および参考文献

- Akiyama, H., Antonucci, T. C. (2003) A Cross - National Study of Social Relations and Mental Health over the Life Course. In *Newsletter of the Institute of Social Science University of Tokyo*, 27, pp. 9-13
- Antonovsky,A. (1987) *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. Jossey-Bay Publ.
- ※参照：アントノフスキー・アーロン (2001) 『健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂高文社, 山崎喜比古, 吉井清子 (訳)
- Antonucci, T.C., Akiyama, H. (1987) An Examination of Sex Differences in Social Support Among Older Men and Women. In: *Sex Roles*, 17: pp. 737-749
- Antonucci, T.C., Jackson,J. (1987) Social support,interpersonal efficacy, and health: A life course perspective. In Carstensen, Edelstein (Eds.) *Handbook of Clinical Gerontology*, pp. 291- 311
- Antonucci, T.C., Lansford, J.E., Schaberg,L., Smith,J., Baltes,M., Akiyama,H., Takahashi,K., Fuhrer,R., Dartigues,J.F. (2001) Widowhood and illness: A comparison of social network characteristics in France, Germany, Japan, and the United States. In *Psychology and Aging*. Vol 16(4), pp. 655-665
- Antonucci, T.C., Akiyama, H., Takahashi,K. (2004) Attachment and close relationships across the life span. In *Attachment and Human Development*. Vol.6, No.4., pp.353-370
- Aries,P. (1977) *L'Homme devant la mort*. Editions du Seuil
- ※ 引用：Aries,P. (2000) *Dějiny smrti*. (Navrátilová, D.訳) Praha: Argo (チェコ語訳)
- 浅川達人 (2003) 「高齢期の間人間関係」古谷野亘, 安藤孝敏(編)『新社会老年学—シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング, pp. 109-139
- Attig,T. (1996) *How We Grieve:Relearning the World*. Oxford Univ. Press
- ※ 参照：アティグ・トーマス (1998) 『死別の悲しみに向きあう』大月書店, 林大(訳)
- Becker,H.S., Geer,B., Hughes,E.C., Strauss,A.L. (1961) *Boys in White: Student Culture in Medical School*. University of Chicago Press
- ベッカー・カール (2000) 「日本の脳死判定採用に反対する理由」梅原猛 (編)『「脳死」と臓器移植』朝日文庫
- ベッカー・カール (2008) 「死の現状」得丸定子 (編)『いのち教育をひもとく—日本と世界』現代図書, pp. 55-72
- ベッカー・カール (2009) 「SOC の現状とスピリチュアル教育の意味」ベッカー・カール, 弓山達也 (編)『いのち 教育 スピリチュアリティ』大正大学出版会, pp. 101-138
- Berkman,L.F., Glass,T. (2000) Social integration, social networks, social support, and health. In Berkman,L.F., Kawachi,I. (eds) *Social epidemiology*. Oxford University Press, pp. 137-173
- Bornat,J. (2004) Oral History. In Seale,F., Gobo,G.,Gubrium,J.F., Silverman,D. (eds.) *Qualitative Research Practice*. Sage, pp.34-47

- Bott, E. (1957) *Family and Social Network (roles, norms and external relationships in ordinary urban families)*. London: Tavistock Publications
- Boudon, R., Besnad, P., Cherkaoui, M., Lecuyer, B. P. (1999) *Dictionnaire de Sociologie*. Larousse-Bordas/HER
 ※ 引用 : *Sociologický slovník*, Univerzita Palackého, Olomouc 2004 (チェコ語訳)
- Bridges, L. J., Moore, A. (2002) Religion and Spirituality in Childhood and Adolescents, In *Child Trends*
- Canter, M. H. (1979) Neighbors and friends - An over looked recourse in the informal support system. In *Research on aging*. 1: pp.434-463
- Carstensen, L. L. (1991) Socioemotional selectivity theory: Social activity in life-span context. In *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, 11, pp.195-217
- Carstensen, L. L., Isaacowitz, D. M., Charles, S. T. (1999) Taking time seriously: a theory of socioemotional selectivity. In *American Psychologist*, 54, pp. 165-181
- Český statistický úřad (チェコ統計局) (2001) *Náboženské vyznání obyvatelstva* (kód: 4110-03)
- Cesta domů-Hospicové občanské sdružení (eds.) (2004) *Umírání a paliativní péče v ČR (situace, reflexe, vyhlídky)*, Public Health Nadace Open Society Fund Praha
- Chochinov, H. M. (2002) Dignity-Conserving Care—A New Model for Palliative Care. Helping the Patient Feel Valued. In *Journal of American Medical Association*. 287, pp.2253-2260
- Chochinov, H. M., Hack, T., Hassard, T., Kristjanson, L. J., McClement, S., Harlos, M. (2005) Dignity Therapy: A Novel Psychotherapeutic Intervention for Patients Near the End of Life. In *Journal of Clinical Oncology*, Vol. 23, No.24, pp. 5520-5525
- Coleman, J. S. (1990) *Foundations of Social Theory*. Cambridge, MA: Harvard University Press
- 大東俊一 (2009) 『日本人の他界観の構造』彩流社
- Drazí zesnulí, skromní pozůstali*. Týden, ročník XVI., 43, p.11, 2009
- Eliade, M. (1964) *Traite d'histoire des religions*. Paris: Payot
 ※ 引用 : Eliade, M. (2004) *Pojednání o dějinách náboženství*. (Vacek, J. 訳) Argo (チェコ語訳)
- Elkind, D. (1964) Age change and religious identity, in *Review of Religious Research*, 6, pp.36-40
- Elkind, D. (1970) The origins of religion in the child, in *Review of Religious Research*, 12, pp.35-42
- Eriksen, T. H. (1995, 2001) *Small Places, Large Issues. An Introduction to Social and Cultural Anthropology*, London: Pluto Press
 ※ 引用 : Eriksen, T. H. (2008) *Sociální a kulturní antropologie*, Praha: Portál, (チェコ語訳)
- Fiori, K. L., Antonucci, T. C., Cortina, K. S. (2006) Social Network Typologies and Mental Health Among Older Adults. In *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 61B-1, pp.25-32
- Fowler, J. W. (1991) Stages in faith consciousness, In F. K. Oser & W. G. Scarlett (ed) *Religious development in childhood and adolescence, New Directions for Child Development*, No. 52 (pp. 27-45)
- Frankl, V. E. (1977) *Trotzdem Ja zum Leben sagen: e. Psychologe erlebt d. Konzentrationslager*. Muenchen: Kösel
- Freeman, L. (1978) Centrality in Social Networks. In *Social Networks*, 1, pp.215-239

- Freeman, L. (2004) *The Development of Social Network Analysis: A Study in the Sociology of Science*. Vancouver: Empirical Press
- 藤井政雄 (1988) 「<見える他界>としての墓——「現代における先祖祭祀の変容」へのコメント」盛岡清美, 藤井政雄 (編) 『生者と死者』三省堂, pp. 107-112
- 藤井政雄 (2007) 「死者と生者の接点 : 日本文化と仏教の聖地観」『死者と生者の接点, <特集>第六十五回学術大会紀要』宗教研究, 80(4), pp. 837-853
- 藤崎宏子 (1998) 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館
- 福田アジオ, 小松和彦 (編) (1998) 『講座 日本民俗学 ①民俗学の方法』雄山閣出版
- 福田アジオ (2004) 『寺・墓・先祖の民俗学』大河書房
- 福田アジオ, 新谷尚紀, 湯川洋司, 神田より子, 中込睦子, 渡邊欣雄 (編) (2006) 『精選 日本民俗辞典』吉川弘文館
- 藤田峯子, 上野範子 (2003) 「在宅被介護高齢者のソーシャル・サポートと精神的健康」『日本看護福祉学会誌』8巻2号, pp. 73-86
- 岐阜県政策研究会 (2010) 「県内の孤独死の推移」岐阜新聞編『お年寄り孤独死, 県内 200 人超 09 年まで 3 年連続』岐阜新聞, 2010 年 08 月 19 日付
- Gorer, G. (1955) The pornography of death. In *Encounter*, pp.49-52
- Gorer, G. (1965) *Death, Grief and Mourning in Contemporary Britain*, London
- 郷堀ヨゼフ (2008) 『日本の高齢者を取り巻く諸相 — 社会的ネットワークの視点から』新潟県地域総合研究所
- 郷堀ヨゼフ, 細江容子, シコラ・ヤン, 得丸定子 (2009) 「介護施設における高齢者の社会的ネットワーク ～介護理念・地域性・家族関係・性別等による影響の観点から～」『教育実践学論集』(10), pp. 159 - 170
- 郷堀ヨゼフ (2009) 「小正月行事に参加する子どもの行動と意識に関する一考察」『日本民俗学会第 61 回年会 研究発表要旨集』p. 50 (発表抄録)
- 郷堀ヨゼフ (2010) 「死生観, 主にあの世とのつながりに関する東西比較研究」『学校教育実践学研究者・指導者の育成一取組報告書』兵庫教育大学, pp. 222-5
- 郷堀ヨゼフ (2010) 「終末高齢期を支える大切な人とのつながり ～生者と死者から成り立つネットワークに関する一考察～」『仏教看護・ビハーラ』4・5号, pp. 176-191
- Granovetter, M. (1983) The Strength of Weak Ties: A Network Theory Revisited. In *Sociological Theory*, 1, pp. 201-233
- 浜口恵俊 (1982) 『間人主義の社会日本』東洋経済新報社
- 原田謙, 杉澤秀博, 浅川達人, 斎藤民 (2005) 「大都市部における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康」『社会学評論』55, pp. 434-448
- Harper, S. (2006) *Ageing Societies*. Oxford University Press, pp. 174-185
- Hashimoto, A., Ikels, C. (2005) Filial Piety in Changing Asian Societies. In: *The Cambridge Handbook of Age and Ageing*, Cambridge University Press, pp.437-442

- 橋本有理子 (2005) 「老年期における家族的役割, 社会的役割と精神的健康との関連性に関する研究」『関西福祉科学大学紀要』第9号, pp. 117~130
- 橋本有理子 (2006) 「老年期における社会的活動, 友人関係と精神的健康との関連性に関する研究」『関西福祉科学大学紀要』第10号, pp. 189~206
- Haškovcová, H. (2000) *Thanatologie. Nauka o umírání*. Praha: Galén
- Hendl, J. (2008) *Kvalitativní výzkum – Základní teorie, metody a aplikace*. Praha: Portál
- Hess, B. (1972) Friendship. In: Riley, M.W. (ed.) *Aging and Society*, 3, pp.357-393
- Hofstede, G. (1984) The cultural relativity of the quality of life concept. In *Academy of Management Review*, 9 (3): pp.389-398
- 飯倉義之 (2008) 「現地の〈声〉と研究倫理」『日本民俗学』253, pp. 75-83
- 池上良正 (2003) 『死者の救済史—供養と憑依の宗教学』角川書店
- 池上良正 (2002) 「死者に口あり—民俗宗教における死者との対話」国立歴史民俗博物館(編) 『異界談義』角川書店
- 池波恵美子 (1991) 『脳死・臓器移植・がん告知』福武書店
- 岩上真珠, 鈴木岩弓, 森謙二, 渡辺秀樹 (2010) 『いま, この日本の家族 絆のゆくえ』弘文堂
- Jerrome, D., Wenger, G.C. (1999) Stability and change in late-life friendship. In *Ageing and Society*, Cambridge University Press, pp. 661-676
- 加地伸行 (1994) 『沈黙の宗教—儒教』筑摩書房
- Kahn, R.L., Antonucci, T.C. (1980) Convoys over the life course. Attachment, roles and social support. In Baltes, P.B. & Brim, O.G. (eds) *Life-Span Development and Behaviour*, pp.253-286
- 金児暁嗣 (1997) 『日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学』新曜社
- 金田久璋 (1995) 「祖霊信仰」赤田光男, 小松和彦(編) 『講座日本の民俗学 ⑦神と靈魂の民俗』雄山閣出版, pp. 231-246
- 金本伊津子 (2001) 「津軽・下北地方における生者と死者の癒しのコミュニケーション—死者の語りと瞑婚2」『平安女子大学院研究年報』2号, pp. 47-54
- 川上新二 (2005) 「韓国における仏教と祖先崇拝に関する一考察」『文化』駒澤大学, 第23号, pp. 44-63
- 川本龍一, 土井貴明, 岡山雅信ほか (2000) 「地域在住高齢者の精神的健康に対する介護の影響に関する調査」『日本老年医学会雑誌』37(11), pp. 912-920
- 川本龍一, 吉田理, 土井貴明 (2004) 「地域在住高齢者の精神的健康に関する調査」『日本老年医学会雑誌』41(1), pp. 92-98
- 川村邦光 (2006) 「戦死者の亡霊と異界」小松和彦(編) 『日本人の異界観』せりか書房, 2006, pp. 83-105
- 川島大輔 (2007) 「死者と生者を結ぶ物語—「浄土でまた会える」という意味づけをめぐる」『京都大学大学院教育学研究科紀要』53号, pp. 150-165

- Klasing, M. J. (2008) *The Cultural Roots of Institutions*. In *University of St. Gallen, Department of Economics, Discussion Paper, No. 24*
- Klass, D., Silverman, P.R., Nickman, S.L. (1996) *Continuing Bonds*, Routledge
- Klass, D. (1999) *The Spiritual Lives of Bereaved Parents*. Brunner/Mazel Taylor&Francis Group
- 小泉弥生, 栗田主一, 関徹ほか (2004) 「都市在住の高齢者におけるソーシャルサポートと抑うつ症状の関連性」『日本老年医学会雑誌』41, pp. 426-433
- 『故事ことわざ辞典』(電子版), 学研, 1998-2001
- 小松和彦 (1997) 『神々の精神史』講談社
- 小松和彦 (1998) 「民俗調査の二類型」福田アジオ, 小松和彦 (編) 『講座 日本民俗学 ① 民俗学の方法』雄山閣出版
- 小松和彦, 関一敏 (編) (2002) 『新しい民俗学へ 一野の学問のためのレッスン 26』せりか書房
- 小松和彦 (2003) 『異界と日本人—絵物語の想像力』角川書店
- 小松和彦 (編) (2006) 『日本人の異界観』せりか書房
- 孝本貢, 八木透 (編) (2006) 『家族と死者祭祀』早稲田大学出版部
- 高齢者痴呆介護研究研修東京センター (編) (2004) 『利用者の生活を支えるユニットケア施設におけるケアと管理・経営』中央法規
- 古谷野亘, 西村昌記, 矢部拓也ほか (2005) 「関係の重複が他者との交流に及ぼす影響: 都市男性高齢者の社会関係」『老年社会学』27(1), pp. 17-23
- 古谷野亘, 矢部拓也, 西村昌記ほか (2007) 「地方都市における高齢者の社会関係—気心が知れた他者の特性」『老年社会学』29(1), pp. 58-64
- 古谷野 (2009) 「高齢期の社会関係: 日本の高齢者についての最近の研究」『聖学院大学論叢』21 (3), pp. 191-200
- 近藤功行, 小松和彦 (編) (2008) 『死の儀法: 在宅死に見る葬の礼節・死生観』ミネルヴァ書房
- Krause, N. (2001) Social support. In Binstock, R.H., George, L.H. (eds.) *Handbook of aging and social sciences (5th ed.)*. San Diego: Academic Press, pp.273-294
- 熊野純彦, 下田正弘 (編) (2008) 『死生学〈2〉死と他界が照らす生』東京大学出版会
- Lansford, J.E., Antonucci, T.C., Akiyama, H., Takahashi, K. (2005) A Quantitative and Qualitative Approach to Social Relationships and Well-Being in the United States and Japan. In *Journal of Comparative Family Studies*. Vol 36 (1), pp.1-22
- Líman, A. (2001) *Mezi nebem a zemí. Ideální místa v japonské tradici*. Praha: Academia
- Litwak, E., Szelenyi, I. (1969) *Primary group structures and their functions: kin, neighbours, and friends*. In *American Sociological Review*, 34 (4): pp.465-481
- Máchal, J. (1995) *Bájesloví slovanské*. Olomouc: Votobia

- 前田直子 (1998) 「老年期の友人関係—別居子関係との比較検討」『社会老年学』通号 28, pp. 58-70
- 前田尚子 (1999) 「非家族からのサポート」折茂肇ほか (編)『新老年学』第2版, 東京大学出版会, pp. 1405-1415
- Maslow, A. H. (1943) A theory of human motivation. In *Psychological Review*. Vol 50(4), pp. 370-396
- McCallister, L., Fischer, C.S. (1978) A procedure for surveying personal networks. In *Sociological Methods and Research*, Vol.,No.2, pp.131-148
- Metcalf, P., Huntington, R. (1991) *Celebrations of Death: The Anthropology of Mortuary Ritual*. Cambridge: University Press (2nd ed.)
- 宮家 準 (2007) 「死者と生者の接点 : 民俗宗教の視点から」『死者と生者の接点, <特集> 第六十五回学術大会紀要』宗教研究, 80(4), pp. 815-836
- 百川敬二 (2007) 「異界」『日本歴史大辞典』小学館
- Moreno, J.L. (1934) *Who Shall Survive?* Washington: Nervous and Mental Disease Publishing Company
- 森岡清美 (1984) 『家の変貌と先祖の祭』日本基督教団出版局
- 諸岡了介, 相澤出, 田代志門, 岡部健 (2008) 「現代の看取りにおける『お迎え』体験の語り」『死生学研究』第9号
- 最上孝敬 (編) (1979) 『葬送墓制研究集成』第4巻, 墓の習俗, 名著出版
- Nagy, M. (1948) The child's theories concerning death. In *Journal of Genetic Psychology*, 83, pp.199-216
- 中村元 (1994) 「空の論理 大乘仏教」『中村元選集 決定版』22巻, 春秋社
- 中野卓, 桜井厚 (編) (1995) 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
- 波平恵美子 (1985) 『ケガレ (民俗宗教シリーズ)』東京堂出版
- 波平恵美子 (1990) 『病と死の文化 現代医療の人類学』朝日選書
- 波平恵美子 (2004) 『日本人の死のかたち』朝日新聞社
- 新潟県糸魚川市 (編) (2005) 「国勢調査の結果 糸魚川市における人口と世帯数」平成18年10月13日付けで確定。
- 新潟県糸魚川市 (編) (2010) 「糸魚川市人口及び世帯表 平成22年1月末現在」
- 野邊政雄 (2005) 「地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性」『社会心理学研究』第21巻第2号, pp. 116-132
- 野邊政雄 (2006) 『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶ノ水書房
- 野邊政雄 (2010) 「日本における高齢者の友人関係に関する研究動向」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第145号, pp. 53-58
- 野口祐二, 杉澤秀博 (1999) 「社会的紐帯と健康」折茂肇ほか (編)『新老年学』第2版, 東京大学出版会, pp. 1343-1348
- 野村豊子 (1998) 『回想法とライフレビュー その理論と技法』中央法規
- 能智正博 (2004) 「理論的なサンプリング: 質的研究ではデータをどのように選択するのか」無藤隆, 南博文, サトウ タツヤ, やまだようこ, 麻生武 (編)『質的心理学—創造的
- 郷堀ヨゼフ 「村落社会の高齢者における生者と死者とのつながり」

- に活用するコツ』新曜社, pp. 78-83
- 能生町史編さん委員会 (編) (1986) 『能生町史』能生町役場, 上巻・下巻
- 落合恵美子 (2000) 『近代家族の曲がり角』角川書店
- 小田島健己 (2009) 「川倉賽の河原地蔵尊にみる花嫁・花婿人形 —〈死者の結婚〉を表現するもの—」『日本民俗学会第61回年会 研究発表要旨集』p. 120
- 大下大圓 (2005) 『癒し癒されるスピリチュアルケア』医学書院
- 小谷みどり (2003) 「死のイメージと死生観」『Life DesignREPORT』6, pp. 4-15
- Patton, M. Q. (1990) *Qualitative evaluation and research methods*. (2nd ed.). Sage Publications
- Piaget, J., Inhelder, B. (1958) *The growth of logical thinking from childhood to adolescence*. Basic Books
- Radcliffe-Brown, A.R. (1952) *Structure and Function in Primitive Society: Essays and Addresses*. Free Press
- Rosenthal, G. (2004) Biographical Research, In Seale, F., Gobo, G., Gubrium, J.F., Silverman, D. (eds.) *Qualitative Research Practice*. Sage, pp. 48-64
- 坂本佳鶴恵 (1990) 「扶養規範の構造分析」『家族社会学』2, pp. 57-69
- 坂本要 (1995) 「他界観と民俗」赤田光男, 小松和彦 (編) 『講座日本の民俗学 ⑦神と靈魂の民俗』雄山閣出版, pp. 205-215
- 桜井徳太郎 (1977) 『靈魂観の系譜 歴史民俗学の視点』筑摩書房
- Salvador, R.J. (2003) What Do Mexicans Celebrate on the "Day of the Dead?" In Morgan, J.D., Laungani, P. (eds.) *Death and Bereavement Around the World, Volume 2: Death and Bereavement in the Americas*. Amityville, NY: Baywood Press
- 佐々木馨 (2002) 『生と死の日本思想-現代の死生観と中世仏教の思想』トランスビュー
- 佐藤弘夫 (2008) 『死者のゆくえ』岩田書院
- 佐藤至英, 戸澤希美 (2003) 「独居高齢者のストレスと QOL との関係」『北方圏生活福祉研究所年報』第9号, pp. 39~45
- Schmitt, J.C. (1994) *Les revenants: les vivants et les mortes dans la société médiévale*. Gallimard
- ※ 引用: Schmitt, J.C. (1998) *Ghost in the Middle Ages: The Living and the Dead in Medieval Society*, The University of Chicago Press (英訳)
- シュールマン・ドナ (Schuurman, D.) (2009) 「お父さんは今何を考えているのだろう — 親を亡くした子供たちへ」ベッカー・カール (編) 『愛する者の死とどう向き合うか』晃洋書房
- 世界保健機関 (1948) 『世界保健機関憲章』(昭和26年 官報掲載の日本語訳)
- 関沢まゆみ (2002) 「葬送儀礼の変容」国立歴史民俗博物館 (編) 『葬儀と墓の現在 民俗の変容』吉川弘文館
- 柴田博 (1985) 『間違いだらけの老人像—俗説とその科学』川島書店
- 柴田博, 杉澤秀博, 長田久雄 (編) 『老年学要論—老いを理解する』建帛社
- 島貫秀樹, 崎原盛造, 芳賀博ほか (2003) 「沖縄農村地域の高齢者における交流頻度と生活

- 満足度および精神的健康との関連--IADL レベルによる比較』『日本民族衛生学会』
69(6), pp.195-204
- 清水恵子, 塩野寛, 上園崇 (2002) 「高齢者の孤独死の死因分析と予防対策 内外因死, 自殺, 事故死の分析」『大和証券ヘルス財団研究業績集』25, pp.16-22
- 新谷 尚紀 (1991) 『両墓制と他界観』吉川弘文館
- 新谷 尚紀 (2008) 「石塔と墓籍簿--実際の死者と記録される死者--両墓制・単墓制の概念を超えて (生老死と儀礼に関する通史的研究)」西本豊弘 (編)『国立歴史民俗博物館研究報告』141, pp.393-492
- 真野俊和 (2001) 『日本の祭りを読み解く』吉川弘文館
- 真野俊和 (2006) 『民俗学的観点に基づく中域的地域システムの研究』科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書
- 真野純子 (2009) 「家来筋がおこなう地侍の供養と屋敷先祖」『日本民俗学会第六一回年会: 研究発表要旨集』p.82
- 新谷 尚紀 (2009) 『お葬式—死と慰霊の日本史』吉川弘文館
- Silverman, D. (2005) *Doing Qualitative Research*. Sage, 2nd Edition
- Simmel, G. (1903) *Die Grosstädte und das Geistesleben*, Dresden: Petermann
- Smith, R.J. (1974) *Ancestor Worship in Contemporary Japan*. Stanford Univ Press
- Smith, R.J. (1983) Ancestor Worship in Contemporary Japan, In *Nanzan Bulletin*, No.7, pp.30-40
- 袖井孝子 (2004) 『少子化社会の家族と福祉』ミネルヴァ書房
- Speece, M. W., Brent, S.B. (1984) Children's Understanding of Death: A Review of Three Components of a Death Concept. In *Child Development*, Vol. 55, pp.1671-1686
- Spradley, J.P. (1979) *The Ethnographic Interview*. New York: Holt, Rinehart and Winston
- Stálá rada České biskupské konference (eds.).(1999) *Sčítání účastníků katolických bohoslužeb v Česku*.
- Stálá rada České biskupské konference (eds.).(2004) *Sčítání účastníků katolických bohoslužeb v Česku*.
- Stálá rada České biskupské konference (eds.).(2009) *Sčítání účastníků katolických bohoslužeb v Česku*.
- Steinhausen-Thiessen & Borchelt, M. (1999) Morbidity, medication, and functional limitation in very old age. In Baltes, P. & Mayer, K. (eds) *The Berlin Aging Study: Aging from 70 to 100*. Cambridge University Press, pp.131-166
- 末木文美士 (2007) 『他者/死者/私』岩波書店
- 末木文美士 (2009) 「日本宗教史と死の臨床」『死の臨床』Vol. 32, No. 1, pp. 27-29
- 杉澤秀博 (2007) 「高齢者と社会」柴田博, 杉澤秀博, 長田久雄 (編)『老年学要論—老いを理解する』建帛社, pp. 199-278
- 須藤功 (1996) 『葬式 —あの世への民俗』青弓社
- 鈴木岩弓 (1982) 「「もり供養」の一考察--参詣者の意識と行動をめぐって」『東北大学文学部日本文化研究』(19), pp. 47-83
- 鈴木岩弓 (1995) 「庄内地方における「もり供養」の寺院行事化現象の実態」『東北大学文
- 郷堀ヨゼフ 「村落社会の高齢者における生者と死者とのつながり」

- 学部日本文化研究』(32), pp. 94-60
- 鈴木岩弓 (2005) 「民俗仏教にみる『死者』への祈り—遺影を手がかりに—」『日本仏教大学年報』第70号, pp. 235-248
- 鈴木岩弓 (2010) 「写真が語る現代人の絆」岩上真珠、鈴木岩弓、森謙二、渡辺秀樹 (著) 『いま、この日本の家族—絆のゆくえ』弘文堂
- Takahashi, K., Ohara, N., Antonucci, T.C., Akiyama, H. (2002) Commonalities and differences in close relationships among the Americans and Japanese: A comparison by the individualism/collectivism concept. In *International Journal of Behavioral Development*. 26 (5), pp. 453-465
- 竹田聰洲 (編) (1979) 『先祖供養—葬送墓制研究集成 (第3巻)』名著出版
- 竹田且 (編) (2000) 『日韓祖先祭祀の比較研究』第一書房
- 田宮仁 (2007) 『「ビハーラ」の提唱と展開』淑徳大学総合福祉学部研究叢書 25、学文社
- 谷川健一 (2010) 「「共存」を失った日本社会」『遠野物語にみる東北際発見シンポジウム—基調講演』東京 2010年7月15日
- 谷山洋三 (2008) 『仏教とスピリチュアルケア』東方出版
- 田代志門 (2009) 「受け継がれていく生」岡部 健/竹之内 裕文 (編) 清水哲郎 (監) 『どう生きどう死ぬか—現場から考える死生学』弓箭書院
- Thomé F., Tilburg, T. V., Groenou, M.B.v., Knipscheer, K. (2005) Network Dynamics in Later Life. In Malcolm L. Johnson (ed) *The Cambridge Handbook of Age and Ageing*, Cambridge University Press, pp.464 - 467
- 徳丸亜木 (1990) 「屋敷神と先祖 : 屋敷神研究の予備的考察」『日本文化研究 : 筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム紀要』2, pp. 39-57
- 得丸定子 (編) (2008) 『いのち教育をひもとく—日本と世界』現代図書
- 東京都総務局 (編) (2005) 「国勢調査結果にみる世帯の現況」『東京都統計』
- 上野淳 (2005) 『高齢社会を生きる : 住み続けられる施設と街のデザイン』鹿島出版会
- 梅原猛 (1989) 『日本人の「あの世」観』中央公論社
- 和辻哲郎 (1934) 『人間の学としての倫理学』岩波書店
- 脇田 健一 (2008) 『死者—生者関係の構造転換 (特集 霊魂観の変遷)』季刊日本思想史, (73), pp. 101-118
- Wellman, B. (1979) The community question: The intimate network of East Yorkers. In *American Journal of Sociology*, pp.84
- Wellman, B., Berkowitz, S.D.(eds.) (1988) *Social Structures: A Network Approach*. Cambridge: Cambridge University Press
- 山田慎也 (2002) 「亡き人を思う」国立歴史民俗博物館 (編) 『異界談義』角川書店, pp. 33-48
- 山田慎也 (2007) 『現代日本の死と葬儀 葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会
- やまだようこ (2000) 「死にゆく過程と人生の物語」ベッカー・カール (編) 『生と死のケアを考える』 pp. 45-65, 法蔵館

- 山形孝夫（2007）「死者と生者の接点：コプト修道院のフィールド・ノートから」『死者と生者の接点, <特集>第六十五回学術大会紀要』宗教研究, 80(4), pp. 854-878
- 山折哲夫（1990）『死の民俗学 日本人の死生観と葬送儀礼』岩波書店
（※引用は『死の民俗学 日本人の死生観と葬送儀礼』岩波現代文庫, 2002）
- 山崎喜比古, 坂野純子, 戸ヶ里泰典(編)（2008）『ストレス対処能力 SOC』有信堂高文社
- 柳田國男（1946）『先祖の話』筑摩書房（※引用は『先祖の話』筑摩書房, 1970）
- 柳田國男（1949）『魂の行くへ』筑摩書房（※引用は「魂の行くえ」『柳田国男全集』第13巻所収, 筑摩書房, 1990）
- 矢野敬一（2006）『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館
- 安田雪（1997）『ネットワーク分析』新曜社
- 横浜市（編）（2010）「孤独死対策で高齢者生活調査」
- 米本昌平（1988）『先端医療革命』中公新書

謝辞

本論文を作成するにあたっては、対象地域の皆さまよりご理解とご協力をいただきました。ここに伏して感謝申し上げます。インタビュー調査のご協力をいただきました皆さまをはじめ、資料のご提供や調査活動へのご協力をいただきました吉田惣栄さま、小杉浩基さま、諏訪部寛栄さま、坂井祐円さま、杉田雪子さま、久保田英明さま、その他の方々に厚く御礼申し上げます。

本研究を第一歩から導いてくださいました上越教育大学大学院得丸定子教授に深く感謝しております。又、本論文の取りまとめに際して、貴重なご意見とご校閲をいただいた国際日本文化研究センター小松和彦教授、岡山大学教育学部野邊政雄教授、兵庫教育大学大学院首藤明和助教授、上越教育大学大学院内田一成教授、上越教育大学大学院増井三夫教授、上越教育大学大学院林泰成教授に深く感謝いたします。又、多大なご助言をいただいた京都大学こころの未来研究センターカール・ベッカー教授、真野俊和氏（筑波大学元教授）、淑徳大学田宮仁教授、お世話になった方々に厚く御礼申し上げます。

次に、筆者を全面的に支え理解してくれる家族に感謝申し上げたいと思います。特に、校閲の際に日本語の表現をチェックし推敲を共に重ねてくれた妻の郷堀久爾子に感謝しています。

最後に、本研究は日本政府国費外国人留学生奨学金により行われたことを付記し、謝意を表いたします。また、本研究の一部は兵庫教育大学連合大学院国際インターンシッププログラムを利用し実現できたことに感謝申し上げます。

付録

- ・付録1 アンケート調査の調査用紙.....112
- ・付録2 インタビュー構成表.....113
- ・付録3 対象者属性詳細.....114

上越教育大学の郷堀ヨゼフと申します。私たちを支えている様々なつながりに関する研究に取り組んでおり、生地域をフィールドに調査を行っているところです。この活動の一環として、皆さまが色々なつながり、特に先祖との関係をどのように意識していらっしゃるかについてアンケートを実施することにいたしました。

このアンケートは、無記名です。お答えいただいた内容については、独自に統計的な処理をいたしますので、回答者個人のご回答の内容は、外部の人にもれることはなく、特定されることもありません。その点は、ご安心ください。どうぞありのままの気持ちを率直にお答えください。どうぞよろしくご協力をお願いいたします。

● まず、あなたについてたずねます。

1. あなたの性別を教えてください。

男性	女性

 2. あなたの年齢を教えてください。 () 歳
3. あなたの実家の家族構成を教えてください。(一緒に住んでいる人すべてに○をつけてください)
- | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|-----|-------|------|---|-----|
| 父親 | 母親 | 祖父 | 祖母 | 夫・妻 | きょうだい | 息子・娘 | 孫 | その他 |
| | | | | | | | | () |
4. あなたの実家には、なにか信仰の対象物がありますか (あるものすべてに○をつけて下さい)
- | | | | | | | |
|----|----|---------|-----|-------|----|-----|
| 仏壇 | 神棚 | ふだ (神札) | 十字架 | 聖マリア像 | なし | その他 |
| | | | | | | () |

● 次の質問について、自分の考えや気持ちに最も近いものに○をつけてください。難しく考えないで、自分のありのままの気持ちで答えてください。空欄にせず、すべてに回答してください。

5. 亡くなった先祖は、私たちを見守ってくれている。

全然そう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	まったくそのとおりだと思う
6. 死後の世界 (あの世、来世) は存在しない。

全然そう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	まったくそのとおりだと思う
7. たまに仏壇や神棚に手を合わせたり、お供えする。

あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
8. 先祖によるタタリを防ぐために
お墓参りやお供養しなければならない。

全然そう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	まったくそのとおりだと思う
9. 毎年、お盆やお彼岸に、先祖のお墓参りをする。

あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
10. 亡くなった先祖がやってくれたこと、残してくれた
ことに対して感謝している。

あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
11. お盆やお彼岸のときに先祖の魂が帰ってくる。

全然そう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	まったくそのとおりだと思う
12. 亡くなった人とのつながりは私たちを支えている。

全然そう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	まったくそのとおりだと思う

● 13. あなたを支えている一番大きな力、一番大きな支えとはどのようなものですか。自由に書いて下さい。

(_____)

どうもありがとうございました。

付録2 インタビュー調査の構成表

項目	内容	
1	挨拶・調査のお願い	自己紹介した上で、調査の旨を伝え、個人情報扱いについて説明して調査をお願いする。対象者の同意を得た上で、インタビューを開始する。
2	個人要因・状況要因	性別・年齢・学歴・退職前職業・健康（心身）状態・収入源・経済的状況などと個人要因を始め、対象者の家族背景・住居形態・婚姻状況について尋ねる。状況要因の主な項目は以下のとおりである：配偶者との物理的距離・配偶者による面会頻度・子ども有無・子どもとの物理的距離・子どもによる面会頻度・友人の有無・友人の人数・親友の有無・親友との物理的距離・親友による面会頻度・近隣ネットワーク（施設へ入居した場合：施設入居期間・入居前の居住形態・施設内の付き合い）等。
3	人間関係の広がり	社会的ネットワーク（家族・友人・近隣・その他）・関係の質・距離感（精神的距離）・面会頻度・情緒的側面など。ネットワーク・メンバーの属性（年齢・性別・対象者との関係・関係の質など）。諸関係における援助、愛情、肯定などについて。
4	人生の振り返り	個人史（ライフストーリー）を用い、対象者の人生を一緒に振り返る。（共同作業）。対象者の価値観・世界観を追求し、人生の危機時の支え、サポートに着目する。ライフレビューの手法ならびにディグニティ・セラピーの構成項目を参考にしながら、振り返りを行う。なお、ディグニティ・セラピーの構成項目を以下に示す（Chochinov, 2002, 2005; 田代, 2009）。（あなたの人生について考えてください。特に、あなたがもっともよく憶えていることや、もっとも大切に思っていることは何ですか。あなたがもっとも生き生きとしていたのはいつ頃ですか。/ あなた自身について、特に家族に知ってほしいことがありますか。あるいは、特に家族に憶えておいてほしいことがありますか。/ あなたが人生で果たした役割の中で、もっとも大切なものは何ですか。/ あなたが成し遂げたことなかで、もっとも大切なことは何ですか。なにもっとも誇りをもっていますか。/ あなたの愛する人に対して、どんな希望や夢を持っていますか。/ あなたが人生について学んだことなかで、ほかの人たちに伝えておきたいと思うことは何ですか。あなたは、あなたの〇〇〇（息子、娘、夫、妻、その他の人）に、どんなアドバイスや導きの言葉を伝えておきたいですか。/ 将来、家族の役に立つように、伝えておきたい言葉や指示はありますか。
5	異界とのネットワーク	話題を「この世」から「あの世」に慎重に移し、死者との関係性についてたずねる。日常と非日常の場面に着目し、振り返り（ライフヒストリー）の一環として人生の様々な場面における死者との関係性の在り方、対象者本人にとっての意義を追求する。死者を対象とする祭祀や先祖崇拝、様々な習俗や習慣ないしは言い伝えなどについてたずね、時間の流れを伴う変容にも注目する。他に、死者とはどのような存在、死後の世界、崇る死者、死に対する不安などと対象者の死生観に関連する質問。
6	まとめ	対象者にとって「大切な存在」とは？対象者をサポートしたり、対象者にとって「大切な存在」である生者と死者との関係から形成されるネットワークを追求し、対象者とともに構図を作成していく。各関係における情緒的・サポート的側面などについてたずね、各関係における距離感、コミュニケーションの有様や関係の質などと具体的な在り方に着目する。
7	お礼	お礼を言い、インタビューを終了する。感想を尋ねる。

付録3 対象者属性詳細表

	性別	年齢 ※2	宗派	出身地	生涯の主な居住地	現在の居住地		主な職業	仏壇有無	仏壇代替	婚姻状況	喪った大切な人	分類 ※1	備考 (最も大切な存在等)
						形態	詳細							
A氏	女	87	禅宗	山村	農村	自宅 農村	家族と 近居	農業	有	—	死別	夫	擬人化	亡き夫、子ども
B氏	女	83	禅宗	別	山村	自宅 山村	家族と 同居	農業	有	—	既婚	子、 兄妹	内面化	夫
C氏	男	84	禅宗	山村	山村	自宅 山村	家族と 同居	農業	有	—	既婚	子、 兄妹	内面化	妻、息子
D氏	女	92	禅宗	農村	農村	自宅 農村	家族と 同居	農業	有	—	死別	夫、 嫁	擬人化	息子
E氏	女	86	真宗	山村	山村	ケア	4年前 入居	農業	無	位牌 帰省	死別	夫	擬人化	亡き夫
F氏	女	83	真宗	別	農村	ケア	1年前 入居	自 営業	無	小型 帰省	死別	夫、 息子	擬人化	「やっぱり 主人ですね」
G氏	女	83	真宗	農村	農村	ケア	11年前 入居	農業	無	無	死別	夫	希薄化	家族、子ども
H氏	男	89	真宗	農村	農村	施設	1年前 入居	農業 兼 工業	無	無	既婚	息 子、 兄妹	内面化	家族、息子
I氏	女	83	真宗	漁村	農村	施設	1年前 入居	農業	無	帰省	死別	夫	希薄化	家族、兄
J氏	女	96	真言	農村	農村	施設	5年前 入居	自 営業	無	帰省	死別	夫、 子	希薄化	家族、息子
K氏	女	91	真宗	漁村	山村	自宅	家族と 同居	農業	有	—	死別	夫	内面化	家族
L氏	女	83	真宗	山村	山村	自宅	家族と 同居	農業	有	—	死別	夫	擬人化	家族、先祖
M氏	男	90	真宗	漁村	漁村	ケア	1年前 入居	林業	無	無	既婚	息 子、 兄妹	内面化	死者との関係「心の中だけです。」

【付録3 対象者の属性】

	性別	年齢	宗派	出身地	生涯の主な居住地	現在の居住地		主な職業	仏壇有無	仏壇代替	婚姻状況	喪った大切な人	分類※1	備考 (最も大切な存在等)
						形態	詳細							
N氏	女	86	真宗	漁村	漁村	ケア	1年前入居	サービス業	無	無	既婚	息子、 兄妹	内面化	夫
O氏	女	84	真宗	漁村	漁村	ケア	入居直後	漁業	無	帰省	既婚	兄妹	内面化	思い出の中の死者/ 船と仕事
P氏	男	84	真	山村	山村	自宅	家族と同居	農業	有	一	既婚	息子、 兄妹	内面化	「先祖のおかげで私たちはいる」/ 妻、家族
Q氏	女	96	禅宗	山村	山村	ケア	1年前入居	農業	無	帰省	死別	夫	擬人化	亡き夫
R氏	男	86	不明	漁村	漁村	ケア	3年前入居	漁業兼建設	無	無	死別	妻、 子ども	希薄化	「死んでしまえば、終わり」/ 自分の力、健康
S氏	男	93	禅宗	山村	農村	ケア	1年前入居	農業兼土木	無	帰省	既婚 ※妻重病	子ども	希薄化	「空想だね。生前のことだ」/ 自分の努力
T氏	女	88	真宗	漁村	漁村	ケア	8年前入居	日雇い	無	帰省	死別	夫、 子ども	内面化	「心の中」/ 子ども、子どもの配偶者
U氏	男	91	真宗	農村	農村	ケア	8年前入居	農業兼藁職人	無	位牌遺影	死別	妻	希薄化	「一本杉」/ お金、健康、自分

	性別	年齢 ※2	宗派	出身地	生涯の主な居住地	現在の居住地		主な職業	仏壇有無	仏壇代替	婚姻状況	喪った大切な人	分類 ※1	備考 (最も大切な存在等)
						形態	詳細							
V氏	女	96	真宗	農村	農村	施設	5年前以上入居	医療福祉	無	読経	死別	夫、子、孫	内面化	亡き夫、亡き母、亡き父
W氏	女	90	禅宗	漁村	農村	ケア	10年前入居	自営業	無	写真「カミダナ」	死別	親せき、兄妹	擬人化	亡き兄
X氏	女	96	真宗	山村	山村	施設	10年前入居	農業	無	無	死別	夫、子ども	内面化	亡き子ども
Y氏	女	84	禅宗	山村	山村	ケア	2年前入居	農業	無	帰省(毎日)	死別	夫、兄妹	擬人化	死者「身近な存在」/亡き兄

※1 本論第2章第2節で述べた死者との関係性のパターン。「擬人化」は擬人化した情緒的関係の省略、「内面化」は内面化した情緒的関係でありの省略、「希薄化」は希薄化した情緒的関係の省略である。

※2 本書に掲載される対象者年齢は調査当時の年齢である(2009年当時)。